

はじめに

世界は平和かどうかと問われれば、平和ではないと誰もが答えるでしょう。日常生活も環境も破壊する戦火が世界各地で絶えないからです。

しかし、戦争などなくても、飢餓や貧困に苦しむ人びとの日常を平和とは誰も思わないでしょう。世界で、飢餓人口は10億人（世界人口の1/6弱）、生命の維持と食料生産に必要な水の不足に悩む人びとは20数億人にのぼり、2億人以上の子どもたちが教育を受けられずに働いています。

では、戦争のない日本は平和でしょうか。日本の相対的貧困率（所得中央値の半分以下の所得の人口比率）はOECD加盟国（30か国）ではメキシコ、米国、英国に次いで第4位（14.9%）（2000年代半ば）と、日本は貧富の差の大きい国です。現に日本では生活保護受給世帯が100万を優に超え、自殺者は毎年3万人以上、行方不明者や変死者もそれぞれ毎年10万人以上出ています。

日本はまた、食べ物が豊富にみえても食料輸入大国です。食料の対外依存度をいっそう高めれば（米国が主導する環太平洋戦略的経済協定（TPP；農産物や工業製品、医療、法律、金融などに関わる自由貿易協定）への参加など）、日本もハイチのように、国土保全や地域文化をも担う農業が壊滅的打撃を受け、食料の高騰と不足、社会の崩壊を招きかねません。ハイチは経済自由化以前、経済的に豊かではなくても飢餓のない社会だったのです。

日本はさらに、戦争放棄の憲法9条がありながら軍事費が世界第4位です。自衛隊はアフリカのジブチに基地をもち、「人道支援」の名のもとベルジャ湾で米軍に給油する一方、在日米軍（首都東京をはじめ全国に130もの基地・施設があり、国土面積0.6%の沖縄県にその75%が集中）による犯罪・事故・事件、騒音被害、環境破壊が続いているうえ、同基地は戦地（ベトナムやイラク）への出撃に使われてきました。日本は米軍駐留経費（「思いやり予算」はその一部）を他の米同盟国26か国以上に負担してもいます。

結局、日本も安定した社会ではなく、平和とは言いがたい状況なのです。

本書は、こうした世界と日本の現実の一端を知るための、環境と平和という21世紀の課題をテーマにした入門書です。どこでも関心のあるところから読めるようになっています。日本や世界のさまざまな事実や出来事を知らなくても、普通に暮らしていけるのではと思う人もいるかもしれません。とはいえ、身の回りのことだけにしか関心をもたないならば、民主的な制度をもつ国家・社会であっても、少しずつ政府に都合良くつくりかえられていく可能性があります。日本や世界の、どのような状況やしくみが、わたしたちの日常に、どのように結びつき、どのような問題をつくり出しているかがみえてくれば、わたしたちは力を合わせて、それらの問題を解決しようと行動を積み重ねていくことができます。手縫いのサッカーボールの生産と子どもの労働など、日常生活の一部が世界の出来事に関係していることはたくさんあります。わたしたちが生きる地球社会を知ることは、地域から少しずつ社会を、そして世界全体を望ましい方向に変えていくための行動への第一歩です。

本書ができるまでには多くの方々にご尽力いただきました。横山正樹先生はじめ、執筆や企画に多くの時間を割いてくださった方々にあつく御礼申し上げます。出版には法律文化社の秋山泰社長、田藤純子氏、上田哲平氏にたいへんお世話になりました。紙面を借りて御礼申し上げます。

2011年4月

編著者 中村 都

【追記】

2011年3月11日、巨大地震をきっかけに福島原発で「原発震災」が起きてしまいました。

日本政府や東京電力、日本のマスメディアは、地震と津波が「想定外」の規模ゆえの原発事故であり、「放射能のレベルはただちに健康に影響しない」と繰り返しています。しかし、原発震災の人為的性格、放射能汚染の広域化とその健康への影響の晩発性は否定できません。また、同政府等の対策・主張や日本のマスメディアの報道には国内外から多くの疑問・批判の声が上がっています。

この原発震災から政府広報やマスメディアのあり方について学ぶとともに、日本社会をどうつくりかえていくか（原子力発電や生活様式、「自衛隊による災害救援」の見直しなど）が日本に住むわたしたちの新たな課題となっています。